

徳島県立博物館

①基本情報

- 昭和34年12月に旧博物館（徳島県博物館）が設置及び開館し、平成2年11月に文化の森総合公園内に現在の建築で開館。考古・歴史民俗・工芸等人文と動植物・地学の自然科学の各分野を扱う総合博物館。
- 開館当初からの基本理念を、**郷土に根ざし世界に広がる博物館／開かれた博物館／研究を大切にする博物館／文化財を守り自然の保全をめざす博物館**とし、博物館の使命に、「**徳島の自然・歴史・文化の宝箱－県民とともに活動し、成長する博物館－**」を掲げる。
- 平成29年から常設展のリニューアルに向けて準備を進め平成30年に「新常設展示基本構想」を策定。約1年間の設計期間を経て、令和3年8月に常設展示室を全面的にリニューアルオープン（展示面積は2495㎡）。新常設展示室は、約54万点の収蔵資料から、これまでの成果を踏まえた、**見て、触れて、感じることができる展示**や**ARやVR技術**を取り入れた体験型の展示を導入。
- 誰もが楽しめる場所となることを目指して、展示の設計段階で視覚障がい者、聴覚障がい者、車いす利用者、外国籍の方とともに「**インクルーシブデザインワークショップ**」を実施し、得られたアイデアを展示手法や展示環境に反映した。
- 平日は学校団体の利用、休日は親子や三世代でのファミリーラーニングの場所としてにぎわう。



出典：徳島県立博物館HP

②展示

コンセプト・ゾーニング

- 新常設展示のコンセプトを「徳島まるづかみ！ -”いのち”と”とき”のモノ語り」とし、来館者に展示の冒頭やリーフレットで伝える。
- 徳島県の見どころをダイジェストで伝える導入展示「徳島まるづかみ」のコーナーを展示のはじまり(ロビーゾーン) に設ける。
- 常設展示のゾーニングは、「コミュニケーションゾーン」を中央に、その周りを12のテーマの各展示室と「ミュージアムストリート」が囲む。ストリーートの壁面で各室の展示の概要を伝え、展示へ誘う回廊型のゾーニング。コミュニケーションゾーンは来館者の対話の場所として、各室の見学の合間にも戻ってこれるようにしている。



導入展示（徳島まるづかみ）

- 新常設展示のコンセプトを具現化する導入展示。徳島の魅力を伝えるとともに、当館の顔として、展示の見どころをダイジェストで紹介。
- 12の展示室のエッセンスを実物資料や映像、図版、大判バナーグラフィック等でコンパクトに紹介する。
- フロアマップをメインゾーンに入る直前に掲出。導入展示で来館者に期待感を高めてもらう効果を狙う。



受付から導入展示への入り口



サイネージで今日のイベント等を伝える

②展示

展示解説／体験型の展示

- 新常設展示の特徴は、実物資料との出会いを大切に、見て、ふれて、感じることができること、ARやVR技術を活用すること、誰もが楽しめること、地域の交流拠点となることがポイント。各展示室にデジタルとアナログ（ハンズオン）をバランスよく取り入れ、子どもに楽しんで学んでもらう仕掛けを工夫した。実際にふれたり、紙に書いたり、アナログな体験が好まれる傾向にある。
- 展示解説のグラフィックを配した什器の高さは低めに感じられるが、車椅子利用者と検証した高さで設定。結果的に子どもにとっても丁度いい高さになった。グラフィックはガラス面にA3紙面を差し込む仕様としており、差し替えを容易にできるようにした。
- 展示解説は、イラストや写真を多用し、キャッチコピーや文章表現も分かりやすく、全体的にポップなイメージに努めている。



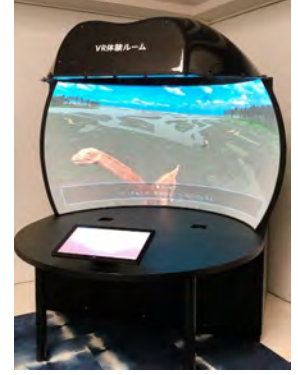
解説面の高さは全ての什器で共通



読むだけではなく体験しながら理解するハンズオン展示／引き出しに仕掛けを施す



前面グラフィックと
一体の資料展示



VR体験ルーム

空間デザインの工夫

- ゾーンや各展示室で、テーマや学習内容の違いを、文字情報ではなく空間全体で直観的に認識してもらう工夫を行っている。動線の迷いを解消し、それぞれの展示の世界に没入できる効果がある。
- 例えば、床カーペットを大胆に貼り分けることや、大判のバナーグラフィックの配置、展示室ごとのキーカラーなどヴィジュアルイメージをつくった。印象の変化がひと目で視認できることがポイント。



ゾーンの違いを示す床カーペットの貼り分け



動線と学習内容が直観的にわかるサイン

②展示

インクルーシブデザインの取り組み

- 設計施工段階に3回ほどインクルーシブデザインワークショップを実施。視覚障がいの方、車椅子利用者、外国籍の方を対象に4グループで、予め決めておいたコーナーや展示物について体験の仕方や解説の表現など実物で検証しながら意見交換した。
- 例えば板碑の場合、アジア圏の人は蓮に着目することがわかり、展示のライティングを工夫するなど新しい展示の見方を得る機会となった。ワークショップには、学芸員と展示設計施工担当も参加。つくる側と利用者がともに考えることに意義がある。
- 一般解説ツールとしてアプリをダウンロードしてもらっている。アプリ上では、音声解説、AR体験のほかに、「手話ツアー」として、学芸員の解説を手話とセットで見てもらえるようにした。ビーコンで反応するため展示物に近づいたら映像スタート。タブレットの貸出も行っている。
- インクルーシブデザインワークショップとは別に県民ワークショップも行った。方言を多めにする、学芸員の顔が見えるようにするなど、意見を展示に取り入れた。



常設展専用アプリ「遊山ナビ」の中の手話コンテンツ



ビーコンやサインでアプリ解説に誘導 WSの結果を照明に反映

コミュニケーションゾーン

- リニューアル前は「ラプラタ記念ホール」という更新世の南アメリカの古生物の骨格標本、模型が展示されていた場所を、思い切って実物資料をおかない「対話・交流」の場所に変えた。
- 動線上、どこからでもアクセスしやすく明るい場所のため、団体利用者のガイダンスや来館者の待ちあい場所等として機能している。
- 学芸員を紹介するコミュニケーションボードや資料データベース、近隣他施設やイベントのお知らせなど、親しみやすく、フィールドへの回遊を促す情報提供を行う。



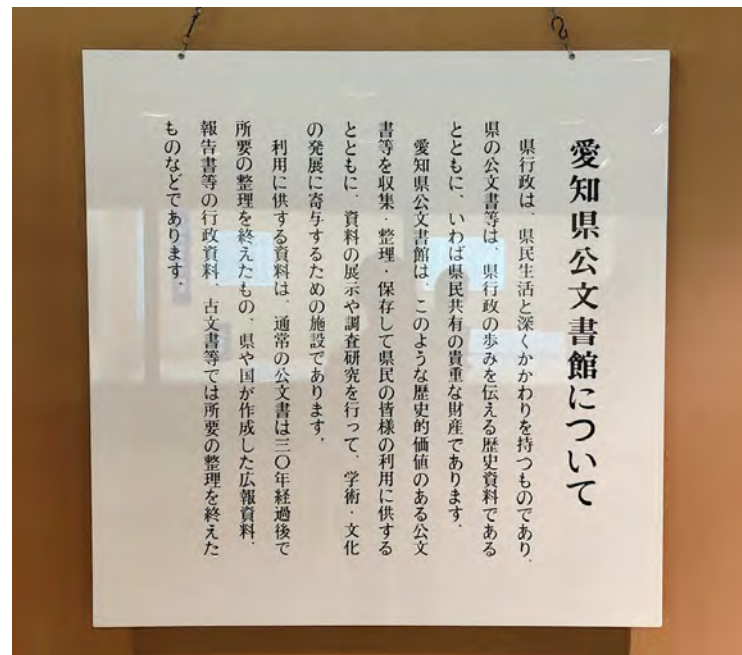
コミュニケーションゾーン

学芸員のイラストは展示の各室にも

愛知県公文書館

概要

- 愛知県の公文書その他資料を収集・整理・保存・活用を図り、学術及び文化の発展に寄与することを目的として、1986（昭和61）年に開館。
- 展示室は1室（112.80 m²）のみ、常設展示/企画展示を展示替え式で運用。
- 企画展は毎年1回秋に2か月間開催。公文書などの原本を展示する。愛知県の教育行政や濃尾大地震、伊勢湾台風等災害の記録など多様なテーマを扱う。
- 地籍図が2千点以上あり、開館当初から当館の重要な資料。ウェブ公開が行われていないため、地籍図閲覧を目的とした来館利用者が多い。
- 令和2年バーチャル文書館を開設。古文書の閲覧が圧倒的に多いが、「愛知の歴史年表」や「デジタル展示室」も利用者がいる。
- 県図書館に当館のPRコーナーを設置するなど図書館連携がある。
- 学生向けに体験学習や職場体験は、学校の要望に応じて実施している。



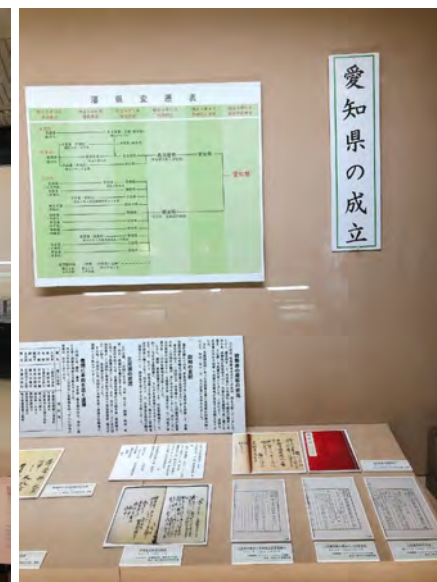
館の理念を掲出



展示室入口



展示室



展示

徳島県立文書館

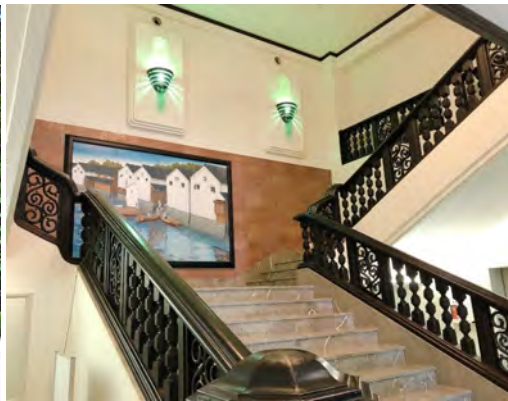
概要

- 平成2年11月「徳島県文化の森総合公園文化施設条例」の規定に基づき、同公園内に、県立図書館や博物館、近代美術館とともに開館。県に関する歴史的文化的価値を有する公文書、古文書、行政資料等の収集保存、活用、調査研究、教育普及を主な業務としている。建築は旧徳島県庁を部分移築し、レトロな外観で親しまれている。
- 展示室は、常設展示ではなく、収蔵資料を使用した年4回の企画展を切れ目なく開催。古文書や古写真、絵図や地図など多岐にわたる資料を扱い、徳島県の歴史を紹介する。幅広い年齢層に人気の企画展は「古写真展」。
- 古文書の解読を行う「徳島の古文書を読む会」の活動が活発。会員数は増加し続けており、現在90名近くが会員で当館の友の会的な存在となる。古文書講座は博物館でも開催されており、好きな人は両方参加している。また、古文書の補修を行うボランティア養成講座を当館で実施しており、現在ボランティアの登録者は19名いる。
- 収蔵資料は、古文書資料等は約30万点を収蔵庫に保管。そのうちデータベース上で公開は10万点ほど。オンラインでの検索の仕方をどのようにすべきか課題としている。
- 文書館資料の対象は、基本は「徳島県」に関わる資料で県域が中心。歴史上の時代区分によっては他県の資料も対象に入る場合もある。
- 歴史公文書を保存することになったきっかけとして、文書館建設に際して、県の公文書館は一番基本にあるべきだということで、館の条例の中に、公文書、古文書、行政文書という3種を取り扱うことが決定した。



外観

出典：徳島県立文書館HP



エントランス



展示室



古文書補修のボランティア活動の様子（講座室）